〔論　説〕

ルカーチのスターリン主義批判

森　彰夫

序
第一章　スターリン支持者としてのルカーチ
第二章　スターリン主義と反スターリン主義のはざまで
第三章　一九五六年とスターリン主義批判
第四章　ルカーチのスターリン主義批判
結び　ルカーチの限界

序

「最悪の社会主義でも最善の資本主義よりましである」[1]というのが最悪の社会主義を生きたルカーチの信念である。この信念がルカーチによるスターリン主義批判を特徴付けている。ソ連亡命中の粛清の時代には、ナチズムに対する闘争を優先させるためスターリン主義に反対を表明していない。一九四五年以後の人民民主主義期に

おいても、積極的に運動に参加した一九五六年や、支持を表明したチェコの一九六八年に対しても、この信念でその運動がもっていたブルジョア民主主義的側面を批判している。

ルカーチは今世紀最大のマルクス主義的文学批評家、哲学者の一人である。一八八五年にブダペストでハンガリー中央信用銀行頭取の次男として生まれ、ブダペスト大学では法律学を学んだ。ドイツではジンメルとウェーバーのもとで学び、新カント派の影響を受けて一九一〇年に『魂と形式』を書き、ヘーゲル哲学を学んだ後、一九一六年に『小説の理論』を書いている。第一次世界大戦終結後の一九一八年十二月二日に結成されたばかりのハンガリー共産党に入党。ハンガリー・ソヴィエト共和国では教育人民委員代理を務めた。革命の敗北後、ウィーンに亡命。ハンガリー革命の総括として一九二三年に出版された『歴史と階級意識』は論争を引き起こし、ジノヴィエフらによってこの著作は激しく非難された。一九二八年に書いた「ブルム・テーゼ」[2]は、それまでのプロレタリア独裁ではなく労働者と農民の民主主義的独裁を提起したが、再び批判される。一九三〇年に一年間モスクワに留学。一九三一年から一九三三年のヒトラーの権力掌握までベルリンに滞在した後、モスクワに亡命。『リテラトゥルニィ・クリティク』に文芸批評を発表するかたわら、一九三八年に『若きヘーゲル』を仕上げる。第二次世界大戦終結後、ハンガリーに帰国。一九五二年に『理性の破壊』を書き終える。一九五六年のナジ・イムレ[3]内閣の文化相となるが、民衆蜂起はソ連軍によって鎮圧され、一九五七年三月までルーマニアで拘留される。一九六〇年代にスターリン主義批判を展開。『社会的存在の存在論』を書き上げ、一九七一年に波乱の生涯を終えた。

今日、スターリン主義と社会主義を意図的に同一視する反動勢力が幅をきかせ、（ブルジョア）民主主義か社会主義かの選択を迫っている。ルカーチはスターリン主義か社会主義的民主主義かという選択こそが真の選択で

あるとし、晩年、スターリン主義のなかにトロツキズムを見るという独自のスターリン主義批判を展開し、「マルクス主義のルネサンス」を唱えた。

本稿では、このような特徴のあるルカーチのスターリン主義批判を考察する。

第一章　スターリン支持者としてのルカーチ

ルカーチは「まだスターリン支持者であると自分自身で思っていた時でも、客観的にはすでにスターリン的方法の反対者であったと言うことができる」[1]と晩年の回想録である「ラジカルな批判的改革の時代の社会主義」で述べている。長い間、一国社会主義の問題をはじめ多くの問題でスターリンと同じ立場に立つ一方、後にスターリン的方法と呼ばれるようになるものに対しては批判の目を向けていた。

ハンガリーの一九一八・一九年革命以降の共産党指導者クン・ベーラ[2]はジノヴィエフの取り巻きで、デマゴギーと暴力と買収という彼のやり方に最初から批判的であった。クン・ベーラには、ジノヴィエフ流の党指導をしていた。回想録でも「コミンテルンのジノヴィエフ一派の指導には最も鋭角的に対立」したと述べている。一九二三年の『歴史と階級意識』に対するクン派のルダシュ・ラースロー[3]による攻撃も、ジノヴィエフとクンの、党内でのルカーチの立場を悪化させようというねらいからなされていた。

ルカーチにとってジノヴィエフ派の次にスターリン的方法と呼ぶようになるものは、「トロツキーのラサールを思い出させる傾向とブハーリンの実証主義に傾いた理論的態度」[4]であり、それらを拒絶している。ラサールについては、ブルーノ・バウアー以前のフィヒテ的ヘーゲル主義、「国家補助による生産協同組合の設立」のように国家と社会の区別が明確でない点、ブルジョア革命とプロレタリア革命との区別を抹消したことや、指導者を

世界史的な出来事の担い手とし大衆はその目標を達成するための手段とみなす世界観などを批判している。ルカーチはマルクスの『ゴータ綱領批判』におけるラサールとの対決の不十分さに危機感を持ち、「マルクスとラサールの往復書簡」(『ディ・ローテ・ファーネ(赤旗)』一九二二年十月四日朝刊)、「統一ドイツ社会民主党の理論家としてのラサール」(『ディ・インターナツィオナーレ』第七巻第十九・二十合併号、一九二四年十月一日)や「ラサール書簡の新版」(『社会主義および労働者運動の歴史のための文庫』第十一巻、一九二五年)[5]を書いている。ブハーリンに関しては、「ブハーリン　史的唯物論の理論」を一九二二年に書き、もろもろの問題をあまりに単純化する傾向を批判している。[6]

ルカーチは党内反対派のランドレル・イェネー派[7]に属していたが、一九二八年にランドレルが急死するとランドレル派の指導者として第二回党大会に提案する「ブルム・テーゼ」と呼ばれている方針案を作成した。ハンガリーの共産主義者は労働組合内で社会民主党費の支払いを拒否すべきであるというクン派を批判するなかで、それまでのプロレタリア独裁ではなく労働者と農民の民主主義的独裁を提起した。しかし農民階級の状態の判断や社会民主党がファシズム的国家機構に民主主義的な衣を着せているというような分析は、当時の社会ファシズム論から完全にまぬがれていなかった。コミンテルンは「ハンガリー共産党員にあてたコミンテルン執行委員会の公開状」のなかでこのテーゼを全面的に批判し、クンらはルカーチを解党主義者として除名しようとしたため、ルカーチは党内に留まるために自己批判した。ルカーチは最晩年の回顧録インタビュー『生きられた思想　対話による自伝』のなかでこの自己批判は便法でしかなく、一九三〇年代に書いた『若きヘーゲル』が「ブルム・テーゼ」の続きであることを明らかにしている。[8]この労働者と農民の民主主義的独裁論は、一九三五年のコミンテルン第七回大会での人民戦線戦術への転換につながる先見の明をもち、スターリン主義に対するアンチテーゼに

なりうる可能性をもっていたが、同時になされた社会民主党批判によって皮肉にもルカーチが当時スターリン主義者としての側面を併せ持っていた証をも示している。

一九三〇年から一九三一年にかけての哲学論争においても「スターリンがプレハーノフの正統主義から決別し、ラジカルに新しいものを唱え、その発展が変わることなく深くマルクスに結びついていた」ことに好感をもった。一九三〇年代の初めのラップ〔ロシア・プロレタリア作家協会〕批判でも同様にスターリンの側に立った。この批判に関しては、「ラップのトロツキー寄りの古い指導部[9]を一掃するための口実にすぎなかった」と後になって気付いていた[10]。

ルカーチは一九三三年に発刊された『リテラトゥルニィ・クリティク』の編集に参加するが、三〇年代のかなりの期間『リテラトゥルニィ・クリティク』とその編集者達に対するソヴィエトの公式見解は好意的なものであった[11]。ルカーチはその理由を、党内で権威をもちスターリンが味方だとみなしていたユージン[12]やレーニンの側近団に属していたウシエヴィチ[13]が編集者で、党中央からさまざまな譲歩をとりつけることができたからであると見ていた[14]。『ルカーチ・ジェルジュの生涯』を書いたヘルマン・イシュトヴァーン[15]は、それは単なるモメントにすぎず、むしろ「作家同盟の国際政策がある意味において、すでに人民戦線政策が支配的になる前にも人民戦線的な路線を代表していたからである[16]」と指摘している。当時、作家同盟はロマン・ローランやバーナード・ショーらと緊密な関係を築き、エイゼンシュテインがアメリカに出かけ『アメリカの悲劇』という映画を作ろうとしていた。『リテラトゥルニィ・クリティク』は一九三九年の独ソ不可侵条約による人民戦線政策の後退とともに廃刊に追い込まれるが、「ブルム・テーゼ」以降、ルカーチの基本的立場である人民戦線とスターリン主義の関係に注目する必要がある。

「ブルム・テーゼ」で提起された路線は、新しい状況のなかで一九三五年のコミンテルン第七回大会で人民戦線政策として党の政策となった。人民戦線政策の勝利によって、大会に出ていたクンの顔は青ざめ、[17]一方、ルカーチや『リテラトゥルニィ・クリティク』が代表していた立場は追認された。彼らの立場は当時、公表されたエンゲルスのバルザック問題についての手紙に依拠し、イデオロギーが作品の美学的な資質の基準ではなく、バルザックの王党派的な良くないイデオロギーにもかかわらず良い文学が生まれることもありうるように、イデオロギーが良くても悪い文学が生まれることもありうるというものであった。彼らは当時の政治的な文学作品を手厳しく批判し、スターリン主義と対立することになったのである。

一九三七年から一九三八年にかけての『リテラトゥルニィ・クリティク』で展開された社会主義リアリズムのためのルカーチのコラムは、「ソ連における当時支配的であった公式見解と対立した」。しかし「スターリン体制総体に対するむき出しのイデオロギー的反対は、イデオロギー的反対が哲学水準にそらされた後でも起こらなかった」[18]と自ら告白している。

ソ連社会に対するルカーチの不満がストレートに表現されたものとしては、一九三九年に書かれた「人民の護民官あるいは官僚主義者」がある。レーニンが『なにをなすべきか?』で、「経済主義者」になりさがった労働組合幹部に対して人民の護民官である必要を訴えたことを引合いに出し、官僚主義的な党指導やプロパガンダに人民の護民官的な方法を対置させて批判した。ルカーチは党指導の正しい諸傾向は、人民戦線政策の宣伝、国際的な平和政策や、外交政策の基本原則などにおいて実を結んでいるが、ソヴィエトの現実においては官僚主義的な上中層部の不熱心さのために実を結んでいないと位置付け、慎重さが窺える。[19]

当時行われた諸裁判に対するルカーチの態度は特徴的である。裁判の対象者はまずトロツキーの思想とその追

随者そして極左的な人物達で、ハンガリー党からはクンが逮捕された。トロツキーに対するルカーチの立場は後の章で詳しく検討するが、理論的に反対の立場であり、クンに対してもすでに見たように相容れない立場であった。ルカーチによると「適用された手段は非難されなければならないことは歴史的に明らかであったにもかかわらず、ジロンド派やダントン派などの一掃のためにジャコバン派に正当性を与えた」ということである。[20] スターリン的方法には反対であるが、スターリンに支持を与えていたので容認したというこの時期のルカーチを象徴している。ベルトルト・ブレヒト、ロマン・ローランやエルンスト・フィッシャーも、この時期ルカーチと同様に考えていた。この立場は被告席に、個人的にも面識があり好感をもっていた人々、例えばブハーリンやピャタコフらが立たされるようになった時にも変えなかった。もちろん、このことは限られた可能性のなかで何もしなかったということではない。一九一八・一九年革命の時期から知っていたケレン・ヨージェフ[21]がソ連で逮捕された時、証言をして救おうと当局に出頭した。「ソ連において工業方面で一緒に働いたことがあるか」という質問に「ない」と答えると、調査官は「これでは証言を使えない」とし、[22] 受け付けなかった。スターリンの行動が「トロツキズムを根底から一掃しなければならない」というスローガンとともに広範な大衆にも広がった時、内的・精神的に道徳的非難の声は大きくなったが、[23]「ヒトラーに対する闘争がなによりも重要であったため、公衆の前ではおしでいなければならなかった」と述懐している。この〝大きな悪を退治するために小さな悪には目をつむる〟というような立場が戦間期のルカーチを特徴付けていて、その〝小さな悪〟の過小評価が晩年に至るまで影響をもたらすのである。

ルカーチの基本的立場である人民戦線政策は広範な同盟を目指すもので、文学・芸術政策や外交政策のなかで展開されたが、ソ連国内の多くの領域ではまったく逆に、社会主義の発展とともに階級闘争は激化し、敵は党の

なかにも侵入するというスターリンのテーゼのもと、粛清裁判が起こり、一九三〇年代初めのクラークの一掃がなされていた。人民戦線政策とスターリン主義は対立物であり、ルカーチは人民戦線の立場でスターリン主義の産物である粛清裁判を捉えるべきではなかったであろうか。

『リテラトゥルニィ・クリティク』が廃刊に追い込まれた後、ルカーチも一九四一年に逮捕された。『生きられた思想　対話による自伝』のなかで、次に列挙するように数々の幸運で粛清を免れることができたと述べている。

・「ブルム・テーゼ」の時期は一九三〇年で、裁判の一九三六・三七年まで時間があった。一九三〇年にモスクワに行った時、ブハーリンはきわめて友好的に接触のお膳立てをしてくれていたが、ルカーチは断わっていてそれが幸いした。ファジェーエフらによって絶えず攻撃されていたが、関与していた雑誌『リテラトゥルニィ・クリティク』で、スターリンが味方だとみなしていたユージンがウシエヴィチを庇護し、ウシエヴィチがルカーチのモスクワでのガールフレンドだったためルカーチも庇護された。ルカーチが非常に粗末な住居に住んでいたので、政治警察の連中にとってあまり魅力がなかった。それにもかかわらず一九四一年に検挙された時はすでに処刑が行われなくなっていて、またディミトロフが将来のハンガリーの指導者として活動していたラーコシ・マーチャーシュ[24]を動かして救ってくれた。[25]

これらの幸運の相関関係で生き残れたのであろうが、基本的に一国社会主義問題でスターリンを支持していたことが粛清を免れた最大の要因であったといえよう。一国社会主義に関連する問題については第二次大戦後に立場を表明しているので、後の章で検討することにする。

第二章　スターリン主義と反スターリン主義のはざまで

一九四五年にルカーチが希望をもって帰国した解放後のハンガリーや東欧諸国では、スターリン公認でプロレタリア独裁を経ず、多様な道を通って社会主義に到達できるという人民民主主義論が展開されていた。ポーランド共産党のゴムウカが「プロレタリア独裁は必要でなく、まして一党独裁は必要でなく目的に合わない」[1]と演説したように、複数政党制による人民民主主義論が社会民主党や農民党だけでなく各国共産党内にも主流を占めつつあった。ハンガリーでは解放後の体制は当初「ハンガリー民主主義」と呼ばれ、人民民主主義と呼ばれるようになるのは一九四五年の後半からで、共産党による人民民主主義の性格付けの作業は他の東欧諸国に比べ遅れていた。[2]しかし共産党のイデオローグのひとりであるレーヴァイ・ヨージェフ[3]は、一九四八年六月のコミンフォルムのユーゴスラヴィア批判決議によって、社会主義への多様な道を進むことが困難になりソ連の経験の機械的模倣を促進する状況に追い込まれた後も、「様々な階級が存在しているにもかかわらず、誤った急進主義のもと一党制に突き進めば自己幻滅する」[4]と依然として複数政党制の必要性を強調していた。

このように複数政党制による人民民主主義論が主流を占めつつあったなかで、ルカーチはゴムウカやレーヴァイと同じように「すぐに社会主義の諸形態を装うことのない」「新しいタイプの人民民主主義」[5]としていたが、彼らと違い複数政党制は形式的民主主義であるとし直接民主主義の重要性を唱えた。ルカーチの提起は、レーニン以来今日に至るまでまだ理論的に明確に整理されているとはいえないブルジョア民主主義と社会主義的民主主義および民主主義の関係の問題であった。この問題を、戦間期の人民主義者の思想を受け継いだ理論家ビボー・イシュトヴァーン[6]が「ハンガリー民主主義の危機」[7]と題する論文で発表すると、ルカーチとの間に論争が起こっ

た。

ビボーは「ハンガリー民主主義」が「プロレタリア独裁からの脅威と反動からの脅威で危機に陥っている」[8]と位置付け、「アングロ＝サクソンとソヴィエト・ロシア型の民主主義の綜合」[9]として「国内的にバランスがとれラジカルな改革政策を続ける民主・独立・自由のハンガリーの可能性という第三の唯一正しい道」[10]を目指すことや、社会主義的解決をすべき領域と私的所有に基づく解決をすべき領域を区別する「限定的・計画的革命」[11]を訴えた。反動からの脅威については、小農業者党内の不純分子を同党が一掃する必要があるというに留まった。プロレタリア独裁からの脅威については、共産党の現在の長期的な路線は民主勢力の連合に基づいた人民戦線的な政策であるが、「ハンガリーにはどの党も喜んで復興に伴う責任や必然的に起こる失敗の負担を引き受けないほど厳しい前提」があり、また「前進する革命だけでなく歪んだ革命も想定できるということを自分の肌で経験したので、今日、目的意識をもった少数の直接的な行動や勝利しようという欲望の抗しきれない爆発やそもそも革命に対して全世界が多かれ少なかれ恐れている」ため「連合政策が必要」となっているにすぎないと強調した。このため共産党に対し「民主的、連合的、人民戦線的政策に具体的な行動綱領を作成する」[12]よう求めた。警察と抑留の問題では、警察機構が共産党の影響下に置かれ、根拠のない抑留・不法逮捕・乱暴な尋問など一定の範囲を越えた行動がなされていたが、「警察は専門行政部門」[13]であるべきとした。

ビボー論文をめぐって討論会がもたれ、ルカーチは「〝民主主義の危機〟あるいは右翼の批判」[14]と題し批判を展開した。まず、警察の問題について「社会や国家の再編期に警察は単なる〝専門行政部門〟ではなく政治・社会の再編のひとつの非常に重要な武器である」[15]とした。ビボーのいう一定の範囲を越えた行動については答えていない。プロレタリア独裁については「プロレタリア独裁を望んでいるまじめな人間やまじめな大衆勢力などい

ないことはビボー自身が知っている」[16]としてとりあわなかった。またビボーが西と東の民主主義を対比させているが、今日のヨーロッパの新しい民主主義の問題を誤解していると批判した。ルカーチはファシズムによって形式的民主主義が危機に陥ったため新しい民主主義の方向に向かった人民運動が形成され、「東のユーゴスラヴィアと西のフランスが今日、ヨーロッパで最も前進した国家である」[17]とし、これを発展させることが重要なのであって「限定革命」とすることではないと強調した。

ビボーは戦間期の人民主義者ネーメト・ラースロー[18]の「第三の道論」を受け継いでいる。ビボーがいうように「アングロ＝サクソンとソヴィエト・ロシア」あるいはハプスブルグとソヴィエト・ロシアをたして二で割ることは単純にはできない。両者の開きは大きく、どこに「第三の道」を設定するかビボーには曖昧である。ルカーチが後に唱えるように〃スターリン主義を克服した社会主義〃というように明確に道を設定する必要がある。ただしどのようにスターリン主義を克服するかはビボーに学ぶ必要がある。ビボーにはルカーチのような西欧ブルジョア民主主義批判が欠如しているが、ルカーチにはスターリン主義に対する甘さが見られる。現に一九四七年以後のスターリン主義的転換・一党独裁は、ビボーの危惧が当たっていたことを証明した。ルカーチが労働者と農民の運動・力関係として民主主義を考えているのに対し、ビボーは運動と制度の両面から考えていた。スターリン主義と民主主義の関係の問題を考える際、ビボーが指摘していた警察、議会や地方自治・行政の問題は、制度の確立という視点でも考慮する必要があるといえよう。ルカーチのビボー批判は冒頭に「右翼の批判」と断罪しているが、一九五六年六月十五日に「ペテーフィ・サークル」[19]の哲学者討論会でルカーチ自身が、「スターリン時代の教条主義は……あらゆる右翼的・左翼的誤りを……その時々の党に支配的な潮流に従って正確に区別することはできたが、論争の中身が何であるかは関心をもちもしなかった」[20]と批判した「スターリン時代の教条主

義」からまぬがれてはいなかったということも指摘されなければならない。

ルカーチはこの後あらためて形式民主主義と直接民主主義の問題について「文学と民主主義」[21]と題する論文を書いている。ルカーチはまず、直接および間接民主主義の対立を取り上げたルソーが、量的要素と諸国家の大きさにポイントを置き、大きな国家では直接民主主義は実現できないとしたことを批判的に検討した。ルカーチは十九―二十世紀の発展は外見上ルソーのこの定義が当てはまることを認めながら、「ブルジョア歴史学者が〝大暴動〟としかみなさない」クロムウェル派の革命や、「歴史学で〝無秩序〟としてのみ表現されている」フランス革命の一七九二―一七九四年とその繰り返しの試みである一八四八―一八七一年が「直接的な民主的要素に満ちていた」が「民主主義の名において武器で押え込まれた」と位置付けている。[22]

そしてこの「間接民主主義の完全な勝利はその完全な強化とともに形式的な民主主義の世界危機の到来をも意味した」とし、間接民主主義とファシズムの関係を説明する。フランス第三共和政は形式的な民主主義のもとで狭い独占資本支配層の〝二百家族〟の無制限な支配があり、「勤労大衆がこの民主主義を自分達の権力とは認めなかったため、ファシズムの最初の攻撃に殆ど抵抗なく崩壊してしまった」とする。ワイマール民主主義は「形式的民主主義からの疎外」の模範例で、「民主主義者なしの民主主義はファシズムの第一撃に対して無抵抗で崩壊したのは当然」[23]とした。つまり形式民主主義のすべての憲法基準（普通選挙権、法の前での平等、集会および出版の自由など）はファッショ化の傾向に対する保障とはならなかったということである。

直接民主主義が社会主義社会のなかでどのように実現されるかについては楽観的である。「あらゆる個々の工場、あらゆる個々の集団農場は、それ自身のすべての問題をすでにかなり直接民主主義の傾向をもった方法で議論し解決していて、このような共同体は、全体計画の枠内で工場などの集団に各自の問題は各自で解決するよう

にかなりの自治を与えている。中央で作られる全体計画は、多分にこのような所で生まれる諸経験、アイデア、批判、提案の影響を受けて作られる」[24]としている。直接民主主義が評議会体制さらには自主管理的な体制のなかで実現されることを述べているが、現実のソ連における指令的経済体制やスターリン主義については考慮されていない。

ルカーチにとって重要なことは「政治はすべての人間の全生活の直接的な各自の問題」であり、各人が政治的主体となり絶え間ない活動、発展、組織化、意識化によって真の人民の権力を確立することである。しかし「形式的民主主義理論の硬化、物神化、その諸形態の神聖化」[25]がファシズムの残滓を克服して人民民主主義を確立する障害となっていたのと同時に、現存する社会主義社会における直接民主主義の形骸化は、政治主体の未成熟とともに制度や形式の軽視が引き起こしたといえないだろうか。

これらの人民民主主義論は、一九四七年のトルーマン・ドクトリン、六月のマーシャル・プラン、一九四八年六月のコミンフォルムのユーゴスラヴィア批判決議といった外部環境の変化によって、一九四八年十二月にディミトロフが人民民主主義はプロレタリア独裁の一形態と規定するに至り、批判の対象となった。ルカーチに対する批判も開始され、以前『歴史と階級意識』を批判したルダシュ・ラースローが急先鋒となり、一九四九年の『社会評論』誌の六―七月号で「文学と民主主義」が批判された。ルカーチの民主主義論は「階級分析がなされず……史的唯物論の方法が全く適用されず……社会的意識から社会的存在を説明し物質的基盤から意識を見ないよく知られた観念論だ」[26]と弾劾された。ルカーチ自身は、一九四九年五月にライク・ラースローが逮捕されるまではまだ楽観視していたようである。しかしライクに対するでっちあげ裁判が進められるに従い、ルカーチもライク期に犠牲になることなく撤退することに努め『社会評論』八―九月号に自己批判文を載せた。[27]

ビボーの危惧していたものが現実のものとなった。農業集団化が強行され、スターリンの工業化理論に盲従した第一次五カ年計画は失敗し、経済的破綻と同時に政治的破綻をも招来し、一九五六年を迎えることになった。

この時期はルカーチにとって、スターリン主義と反スターリン主義がぶつかりあっている時期と位置付けられる。ルカーチは一九四六年に『実存主義』[28]を書いている。ルカーチは、あらゆる非合理的でブルジョア的な傾向が必然的にファシズムを生んだという考え方から、サルトルらのフランスの実存主義がレジスタンスに立ち上がった知識人のイデオロギーにおいて果たした固有の役割を評価することができなかった。さらに一九五四年の『理性の破壊』で、リベラルなニーチェ崇拝者であるワルテル・カウフマンを最も反動的な非合理主義に位置付けるというような誤りを犯した。ドイツの反動思想の発展を分析する際、ドイツの発展からは比較的独立していたベルグソンやソレルあるいはクローチェまで簡単に引き入れてしまったりしていた。

一九四九年から五〇年にかけてのルカーチに対する攻撃は「スターリンの概念と方法を原理的に批判することなく思想上の細部において真に批判する」[29]というそれまでの試みが、いかに幻想をもったものであったかを明らかにした。同時にライク裁判が最終的にこの問題の複合体をルカーチの前に明らかにしたため、一九五六年を迎えてルカーチもスターリン主義に対する正面からの対決を開始した。

第三章　一九五六年とスターリン主義批判

一九五六年二月、ソ連共産党第二十回大会でフルシチョフがスターリン批判を行い、ハンガリーではラーコシ批判が盛り上がった。フルシチョフはスターリン個人の性格、政治的技術を問題にしたが、ハンガリーの民衆の不満はそれに留まらず政策や社会構造をはじめ全般に渡るものであった。ルカーチは一九五六年を「ひとつの偉

大な運動」と捉え、「この自然発生的な運動はなんらかのイデオロギーを必要としていた」[1]のでこれに応えようとした。

まず知識人によって作られた「ペテーフィ・サークル」の六月十五日の哲学者討論会においてスターリン主義批判を開始した。ルカーチは工業発展のなかで犯された誤りと平行して「マルクス主義の状態がホルティ[2]時代よりもひどく」なってしまったとし、スターリン主義によって失われた「マルクス主義の威信を取り戻す」ことを訴えた[3]。

六月二十八日のハンガリー勤労者党の政治アカデミーでは「現代文化における進歩と反動の闘争」と題する演説を行い、戦略上の誤りを指摘した。スターリンの政策を決定する主要な公理は「対立の絶え間ない激化の不可避性で、ソ連の国内政策に適用されただけではなく……必然的に第三次世界大戦の予想をも意味していた」が、ルカーチは現在の真の運動法則を表現したものは戦争と平和の闘い、すなわち平和共存のための闘いであるとした。「すべての資本主義国においてその国家の独自な発展の弁証法が社会主義に導き」、他国の共産主義者はこの発展にイデオロギー的にだけ影響を与えることができ、「平和共存に真剣に取り組めば取り組むほど、社会主義を人間的に建設すればするほど」、社会主義の勝利を国際的な規模においてもたらすことができると訴えた。まさに反動が「すべての現実的な問題を大きな一般的な世界史的矛盾である資本主義と社会主義の矛盾に単純化しようとする」[4]とした。ハンガリーの一九四七年以降のスターリン主義的転換で「対立の絶え間ない激化の不可避性」の論理が前面に出され、弁証法的に正しい戦略が立てられていなかったうえ、スターリン時代の弁証法的唯物論の歪曲、教条的な狭小化によってあらゆる分析が停滞し、中身のない決まり文句と道理にかなわない攻撃しかなく、「我々の方に近付く意志をもったかもしれない人々を反動の方に押しやってしまって」[5]いたのである。

戦略と戦術の問題は「ブルム・テーゼ」をめぐる問題として、「現代文化における進歩と反動の闘争」の演説に前後して六月二十日と三十日に党史研究所において討議された。この討議で初めて「ブルム・テーゼ」は原則的に正しいと復権が認められたのであるが、戦略と戦術の問題はスターリン主義との関係においても捉え直す必要がある。

ハンガリーで日程にのせられていた共産党の戦略は、サーントー・レジェー[6]が討議のなかで述べたように「民主主義的独裁であろうとプロレタリア独裁の任務であろうと、その目的は常に社会主義革命、労働者階級権力の構築で……他のことは戦術上の問題」[7]にすぎないというものであった。これに対してカトー・イシュトヴァーン[8]らは、コミンテルン第七回大会の転換が「戦術としてファシズムによって我々がしいられた回り道としてのみ捉えられ、戦略として捉えられなかった」点や、「この転換はドイツのファシズムが勝利したためにだけ必要となったのではなく、それ以前にも党内ではすでに時期がきていた」[9]ことを指摘した。スペイン共産党のホセ・ディアスが、「『インターナショナル』誌（一九三八年第八号）において大会によって示された戦略上の路線について強調して書いている」[10]。しかしその後、第七回大会の転換を戦略の転換として明確に位置付けられることはなく、一九五六年になってやっとハンガリーの若い歴史家たちによってなされたのである。シクローシュ・アンドラーシュ[11]は人民戦線政策が「ファシズムとだけ関連しているという考え方は……ファシズムを打破したら社会主義的措置のための直接的な闘争に……戻ることができることを意味する」[12]と批判した。この逆戻りは、ハンガリーでは一九四八―四九年に起こったのである。このように彼らは人民戦線をかなり長期間の戦略として考えていた。

レーニンは『民主主義革命における社会民主党の二つの戦術』のなかで「プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁は無条件に社会主義者の過渡的で一時的な任務にすぎないが、しかし民主主義革命の時代にこの任

務を無視することはまったく反動的である」と規定している。「ブルム・テーゼ」はレーニンのこの規定に基づき戦略問題の見直しを提起していたといえよう。ルカーチは討議のなかで、プロレタリアートと農民の民主主義的独裁について「ブルジョア民主主義革命と一般に同一視する傾向がある」[13]とし、「ブルジョア民主主義革命においてプロレタリアートの指導によってもたらされる限定的で特別な過渡形態」[14]と定義付けた。この「プロレタリアートの指導によって」という定義については討議のなかで特に問題にされなかったが、「プロレタリアートの指導」が「共産党の指導」さらには「スターリンの指導」に容易に進んでしまって、プロレタリア独裁やスターリン独裁となんら変わらなくなるという危険性をはらんでいる。プロレタリアートと農民が対等に民主主義的独裁を行うためには不適当な定義であると思われる。

サーントーの定義ではまずプロレタリアートが権力を獲得することが第一の任務である。一段階革命論者であるトロツキーも、「誰が政府の中で、そしてそれによって国の中で、ヘゲモニーをとっているのか？　労働者政府について語るとき、われわれは、ヘゲモニーが労働者階級に属していることを意味」[15]すると規定している。権力あるいはヘゲモニーについてはグラムシのように「ある政治階級のヘゲモニーとは、その階級が社会の他の諸階級に自らの道徳的、政治的、文化的価値を承認させるのに成功したことを意味」[16]すると捉える必要があるのではないだろうか。プロレタリアートが権力を獲得することを第一義とする方法は、プロレタリア独裁の「暴力」の側面が必然的に強くなり、スターリン的諸方法が不可避になるといえよう。人民戦線あるいはプロレタリアートと農民の民主主義的独裁は、どのようにしたら反動を追い詰め打倒できるかという方法論をもち、スターリン主義を克服する可能性をもっていると思われる。このようにスターリン主義と戦略の問題は直接的な関連をもっている。しかしカールマン・エンドレ[17]が「すべての誤りを単純に戦略路線のせいにすることはできない」[18]と述べ

たように、日々の諸問題の具体的な検討の不十分さも指摘される必要があった。

このようにルカーチはイデオローグとして積極的に発言し、十月二十三日の民衆蜂起が勃発した後、十月二十六日にナジ・イムレ内閣の文化相となった。しかしルカーチは大衆に完全に支持されていたわけではなかった。科学アカデミーの門に「モスクワ派」をアカデミーから追放することを要求したスローガンがかけられ、ルカーチの名前もあった。また科学アカデミーの革命委員会では、マダーチ・イムレについて書いた論説[19]がハンガリーの人民を傷つけたとして、ルカーチをアカデミーから追放しようという提案がなされたりした[20]。ルカーチはナジ内閣によるワルシャワ条約機構からの脱退・中立宣言には反対していた。ルカーチはワルシャワ条約機構の一員であることを単純に肯定し、またソ連に介入のきっかけを与えてはならないと考えたのである。十一月四日にソ連軍による攻撃が開始され、ナジ政権の閣僚およびその家族はユーゴスラヴィア大使館に避難したが、十一月二十二日にはルーマニアに連行された。こうして「偉大な運動」は鎮圧され、ルカーチは一九五七年三月末になってハンガリーに戻された。

第四章　ルカーチのスターリン主義批判

一九五七年以降のルカーチは「美学」や「存在論」に取り組む一方、イデオローグとして主に外国での出版やジャーナリズムを通して体系的にスターリン主義批判を展開した。

ルカーチのスターリン主義批判の特徴はスターリン主義のなかにトロツキズムをみていることで、それはいわゆる「カロッツィ書簡」[1]のなかで展開されている。アルベルト・カロッツィとアルベルト・モラヴィアによって発行されているイタリアの左翼誌『ヌオヴィアルグメンティ』が一九六二年に国際労働運動の何人かの著名な人

物に試みた諸設問に対し、ルカーチは〝謹慎〟の身であるが「完全に沈黙したくないので……私書簡という形で」[2]答え、一般に「カロッツィ書簡」と呼ばれている。

ルカーチは、スターリンが一九三〇年代およびそれ以降、不当に追及し有罪にして殺した人すべての名誉回復がなされなければならないとするが、同時に彼らの「政治的誤謬や誤った見解までもこれとともに〝名誉回復〟され」てしまってはならないとしている。このことは特にトロツキーに関連する。トロツキーは社会主義建設は一国では不可能であるとし、〝革命的戦争〟によって社会主義の基盤を広げることを提唱していた。ルカーチは革命的戦争によって「十一月七日以前の状態に戻って」しまう可能性が大きく、「当時の決定的な戦略問題においてスターリンが完全に正しかった」[3]と断定している。一国社会主義の問題ではルカーチは一貫してスターリンの側に立っている。

ルカーチは「トロツキーが権力を握っていたなら、スターリンより民主的な発展を開始させていただろうという西側で大変広まっている話は正しくない」と強調し、例として一九二一年の労働組合論争をあげている。トロツキーは、生産をより効果的に助けるよう労働組合を国有化し自立的であることをやめるべきであると主張していた。これに対してレーニンは、プロレタリア民主主義の意味において労働組合は党と国家権力の中間に位置し、労働者が必要ならば官僚主義化した国家に対して物質的・精神的諸利益を守る必要があると位置付けていた。ルカーチは「スターリン……以後になって現実にレーニンではなくトロツキーの路線を採用した」とし、「今日、スターリン時代から独裁的・反民主主義的と考えられるものは戦略問題に関するトロツキーの基本的立場に非常に近い関係にある」としている。また一九二一年にトロツキーに会った時の印象として「個人的にさらにスターリンよりも強く〝個人崇拝〟に傾いていたという確信を抱いた」とまで断言している。[4]

トロツキーが断固たる反スターリン主義者・反官僚主義者であったことはよく知られている。一九二一年三月のクロンシュタットの反乱事件の後、第十回党大会で党内の分派や思想的グループ化を禁止する決議がなされたことについて、トロツキーは「ドイツだけでも革命が勝利していたならば」という条件付きながら、「他のソヴィエト諸党を禁止する必要はたちまち消え去ったことであろう。単一政党の支配がスターリニスト的全体主義体制への法的出発点になったことに議論の余地はない」[5]とし、多党制を肯定していた。しかしトロツキーが自らの内のスターリン主義的傾向に気が付かず、そのスターリン主義批判がルカーチがいうように国家と党の関係の見直しや労働組合の活性化ではなく、大衆的武装蜂起による政治革命という空論的な結論に行き着いてしまったといえよう。

ルカーチは、スターリン主義的政治体制は、まず党内討論が系統的に衰退、次に反抗者に対する組織的措置が増加、そしてこれらが裁判や国家的・行政的措置へ肥大化して形成されたと見ている。当時のロシアの政治小話にも「問　ヘーゲルとスターリンの違いは何でしょう？　答　ヘーゲルにはテーゼ、アンチテーゼそしてジンテーゼがあり、スターリンには報告、年次報告そして組織的措置がある」というのがある。[6]

スターリンは「あらゆる所で可能な限りすべての中間を削除し、最も荒い事実を直接最も一般的な理論的見解に結び付ける」傾向をもっているとルカーチは指摘する。レーニンは理論と戦略および戦術の間に非常に正確な区分を用い、しばしば矛盾的にこれらを結び付けるあらゆる中間物を慎重に研究し考慮にいれていた。レーニンにとって非常に重要な概念である戦術的後退は、ルカーチがいうように「その必然性と有益性が、最も一般的な原理からではなく、いつも具体的な力関係から出発する時にだけ理解できる」[7]ものである。

このスターリンの傾向は一九三九年の独ソ不可侵条約に顕著に現れている。チェンバレンとダラディエが支持

したであろうヒトラーのソ連攻撃を引き延ばし、西方への攻撃に向けさせるという戦術は正しかった。しかしルカーチは、スターリンが理論的な橋渡しもなく「ヒトラーのドイツと西側権力との間に勃発している戦争を第一次世界大戦と同じように帝国主義戦争と位置付け」、レーニンの当時の正しい戦略的なスローガン（〝敵は我々の国のなかにいる〟や〝帝国主義戦争を内戦に転化しなければならない〟など）を押し付け、英仏の反ファシズムの運動を麻痺させたと批判する。[8] これはソ連国家の擁護を第一義とするエタティズムから生じたといえよう。

スターリンの方法論のグロテスクな例は中国問題にも見られた。トロツキーとその支持者は、中国ではマルクスによって書かれたアジア的生産関係が支配しているので、封建主義から資本主義への過渡であるブルジョア民主主義革命は必要なく、直接、プロレタリア革命が起ころうとしているという見解を持っていた。これに反対したスターリンは、「中国の現状とこれから引き出される戦術的任務の具体的な分析によってこの見解を論駁するかわりに、単純に科学からアジア的生産関係を消してしまい、中国の（一般的にアジア的な）封建主義なるものを発明」[9]してしまったとルカーチは批判している。

スターリンは引用することでレーニンの著作との継続性を示したかったため、事実だけではなくレーニンの文章さえも押し曲げた。その最も甚だしい例として、一九〇五年に党の印刷・出版のなかに秩序を設けようとして書かれたレーニンの記事が、「作家を大きな機械の単なるねじに変えてしまおうという意図を持ったスターリンのもとで、文化の全領域で特に文学においてこの記事は徐々に〝党派心〟のバイブルとなった」ことをルカーチは指摘している。そしてレーニンの妻クループスカヤが「レーニンのこの記事は全く小説には関連しないと手紙のなかで述べているにもかかわらず、まだ今日でもバイブルはバイブルのままで残るようにという努力がなされている」[10]と批判している。

ルカーチは、科学が提供する材料や視点をもとに政治決定をするという本来のマルクス主義の関係をスターリンが逆転させたと考えている。スターリンによって「〝党派心〟という理由でアジテーションが最優先され……科学は何をどのように言わなければならないか」を決定されるようになったというのである。ルカーチはこのスターリンの方法論はスターリンによって意図されていたものでもあったと考えている。すなわち「スターリンには機構が正確に決定を遂行し、できる限り広範な大衆もそれに賛同する必要があったので、ラジカルに理論上の発言を単純化した」とする。「スターリンがプロレタリア独裁において階級闘争の絶え間ない激化は必然的であるというアジテーションを……とにかく急いで発見した」こともこのためであったとする。

ルカーチは当然、これらは偶然の誤りではなく、徐々に発展する誤った体系の問題であると考えていた。また「スターリンの方法のほうがマルクスやレーニンの方法でよりはるかに快適に統治できるため……新しいものに対しては外見上溶け込むだけで……この体制は才能のない者や簡単に適応する者達のパラダイスで……才能のある者の多くは被害を被らないように継続的な抑圧に反対できないでいた」[11]と述べている。現在の改革が遅々として進まないのも誤った体系が染み着いてしまっているからであるといえよう。

このような困難な過渡期にルカーチは「共産主義的な意味の全般的な民主化を社会的存在のなかで慣らすような経済的・政治的措置」の必要性を訴えた。ソ連共産党第二十二回大会で党組織の選挙で前指導部の二十五パーセントは再選できないと決定したことを例として高く評価した[12]。

一九六〇年代後半、ハンガリーでは経済改革が日程に上った。在庫の増大、投資の不均衡、必要物資の供給不足、生産性の低下が著しくなり、一九六八年一月から「新経済機構」[13]が導入された。導入の直前、一九六七年の『ネープサバチャーグ』[14]のクリスマス号でルカーチに対してインタビューが行われているので、ルカーチの経済

改革に対する考え方を知ることができる。

改革の支持者であるルカーチは、「新経済機構」を特に「ソ連共産党の第二十回大会が開始させた道を継承している非常に重要で積極的なステップ」であると評価し、社会主義的生産を歪みから解放しようという実験であるとともに、「マルクス主義のルネサンスを可能にし必要にする一方、レーニンが初期に指導していたプロレタリア民主主義と呼んでいるものに立ち帰ることを可能にし必要とさせるステップ」[15]と捉えていた。

ルカーチはそれまでの路線からの決別が十分になされていないことに不満を持っていた。「ある良いものの代わりにより良いものが来て、ある悪いものの代わりに良いものが来るのではない」と言われていることに対して、一九二一年にネップを導入したレーニンを引合いに出して批判している。レーニンは「全く率直に戦時共産主義は原理的に支持できない政策であったが、情勢が我々をそれに強制していた……ネップは戦時共産主義の対立物であると言った」[16]と強調する。すなわち一九一七年のソ連では、以前からの軍隊、経済や他の専門家の大部分は実際に反革命の支持者であったため、生産においても軍隊においても人民委員体制を導入することが必要であったが、それはスターリン時代に衰退するのではなく、さらに強まり、官僚主義的な集中をもたらした。しかし教育を受けた広範な専門知識人と熟練労働者が生み出され、このような階層をそれまでの方法で統制することができなくなったと考えていた。興味深いのは、ルカーチがそれまでの中央集権的な計画による指令経済を戦時共産主義に、経済改革をネップに対比させたことである。

ルカーチは方法の変化を意識化し主体的な役割を強化させようとした。大衆が形式的に行動しないように〝衝撃〟を与え、一九六〇年代の初めから行われた様々な経済政策の手直しの延長・拡大としてのみ捉える傾向に対して、はっきりと決別し本質的なネップになるよう望んだのである。

チェコスロヴァキアにおいても一九六七年一月から「新経済政策」が実施され「プラハの春」が始まったが、一九六八年八月にワルシャワ条約軍によって鎮圧されるという事件が起こった。ルカーチははっきりとチェコ支持の立場を明らかにし、ワルシャワ条約軍としてハンガリー軍を参加させたカーダール第一書記に抗議の手紙を送った。

このチェコ事件に関連してルカーチは一九六八年秋、「民主化の今日と明日」と題する論文を書いている。この論文はドイツ語で書かれ、そのハンガリー語訳の一部分がルカーチの『レーニン』[17]のなかと一九八一年の『ヴィラーゴッシャーグ（明解）』八・九月号[18]と一九八四年の『ヴィラーゴッシャーグ』四月号[19]に紹介され、全文はドイツ語で一九八五年に出版[20]され、ハンガリー語では一九八八年に出版されている。最晩年に書かれたこの論文はいくつかの非常に重要な論点を含んでいる。

まず注目されるのは「プラハの春」で複数政党制が要求されたことを念頭において、これまでと同様に複数政党制を否定していることである。ルカーチは複数主義は「思想操作の設置物」にすぎず、「マルクス主義はあらゆる問題において唯一つの客観的現実に相応する正しい回答だけ」を追求するとする。ただしこの回答は「何か即席の決定から生まれるのではなく、研究や分析などによって生まれ、そして議論のなかで批判的に正確に検討されるべきものであるため、しばしば長い時間が必要である」[21]と述べている。「真理は一つである」というのがルカーチの信念であるが、その真理に至るまでには長い時間をかけた議論が必要で、その議論が多様であることまでは否定していない。

この点は一九七〇年一月にもたれたユーゴスラヴィアの『ヘートナプ（七日間）』誌のインタビューで、より明確に述べられている。ルカーチは「今日登場しつつあるマルクス主義はこれまで大変多様で多音的（ポリフォニック）で、実際い

くらかの者は何か複数主義的な特徴があると言っている」と表現し、多様性と複数主義とを区別していると考えられる。ユーゴスラヴィアの記者に対して「好感を持つということは、人がすべての問題で賛成することではなく、両者が同じあの大問題の兵隊であると感じること、お互いに大変鋭角的に論争していても一つの目的のために論争しているということを知っているということにある」と述べている。また「西側の複数主義とは一線を画す必要がある」と述べている。[22] このことからルカーチは社会主義を目的とする多様性を評価するが、社会主義を目的としないものをも含む多様性は「西側の複数主義」であり否定するという立場であることがわかる。

ルカーチは「民主化の今日と明日」のなかで、社会主義的民主主義の実現を複数政党制ではなく、党内民主主義の確立、国家と党の分業化、労働組合をトロツキーの立場ではなくレーニンの立場で発展させるという方向でなされるよう訴えている。「文学と民主主義」のなかで述べた直接民主主義の現象形態といえる評議会制度については、ここでは非常に慎重な態度をとっている。「我々の考察は最大限、純粋に理論的に可能な見通しについて信頼できる非常に一般的な外観を示すように望むことしかできない」[23]と述べ、設立された労働者評議会が否定されたチェコ事件直後の困難さを物語っている。

一九八八年になってハンガリーの改革は複数政党制の導入を検討するなど、新しい局面を迎えている。しかし複数主義をブルジョア民主主義と定義付けるのか否か統一されていないようである。改革派のリーダーの一人であるポジュガイ・イムレ[24]は、「複数政党制に対して原理的な議論を持ち出すことは私はできない。しかしながら実践的な議論はイエスだ……政治的安定が壊れないよう何らかの社会的妥協のなかで準備しなければならない」[25]と述べている。ポジュガイのように複数政党制を原理的に肯定する党指導者はまだ少数である。

「民主化の今日と明日」のなかのもう一つの重要な点は、経済におけるスターリン主義を理論的に批判してい

ることである。なかでもマルクスの原始蓄積論を現実に展開されている過程に当てはめただけの「社会主義的原始蓄積論」を批判し、商品生産の消滅とともに価値法則も消滅するとしたスターリンに対し、価値法則は消滅しないとしたことは歴史的意義を持つ。

ルカーチはレーニンが「工業生産の復興やネップ政策の直接的で最も決定的な問題において、すでに一九〇五年と一九一七年の革命期に政策の中心にあったこの〔プロレタリアートと農民〕の同盟を実際に回復させることに特に欠くことのできない手段を見ていて……同時にロシア工業の経済的復興過程に外国資本の一時的な参加を認める用意もしていた」ことを強調する。しかしレーニンの死後、誰の負担で経済復興を達成しなければならないかが中心問題となった。プレオブラジェンスキーとトロツキーは農民の犠牲で重工業を建設する「社会主義的原始蓄積」を唱え、ブハーリンは工業が必要な物資で地方を潤すことを唱えた。ルカーチは両者が「それぞれ純粋に経済問題に歪小化させ……戦術的な二者択一に狭め……レーニンが中心問題として捉えていた〔プロレタリアートと農民の同盟〕の視点を実践的にも理論的にも全く完全に一掃してしまった」と批判する。スターリンはトロツキーを権力につかせないように両者の間を非常に巧妙に立ち回り、両者を弱めさせ、両者が政治的に消滅すると「彼自身が非常にエネルギッシュに最も残忍な手段で『社会主義的原始蓄積』を実現」したと指摘する(26)。

ルカーチは「社会主義的原始蓄積」自体を否定したのではない。マルクスの原始蓄積論は資本主義経済の古典的形態の正常な起源についてのもので、高度に発達した資本主義国で社会主義が建設されるならば、「社会主義的原始蓄積」は問題にならないであろう。しかし後進国では社会主義経済体制の効果的な基盤になるように、生産を資本主義の高い水準にもっていかなければならない。資本主義の原始蓄積が純粋に経済的なもので自然発生

的に再生産過程が始まったのに対し、ルカーチは「社会主義では意識的な指導が新しいより複雑な任務とともに」なされる必要があるとする。特に文化を重視し、文化は「非常に発達した資本主義のなかでも経済が自己展開する際に生じる副産物にすぎない」が、社会主義においては「経済的にも文化的にも同様に低い水準の階層の人々が最も高い教養水準に向上することによって、非常に価値のある科学的・芸術的産物が大衆的影響を持つことなどの現象」がみられるように、「単に経済的に決定される」のではないとする。[27] ルカーチは、労働者と農民の同盟、外国資本の活用、文化を重視することで「社会主義的原始蓄積」を考えたのである。

ロシア革命の最も主要な問題である「非古典性」の克服、すなわち経済的後進性の問題が純粋に経済問題に歪小化されると、経済学自体も単純な専門科学になってしまった。この傾向はスターリンに顕著で、その頂点をなすのが『ソ同盟における社会主義の経済的諸問題』である。ルカーチは「この著作の実践的・プロパガンダ的な目的は、マルクスの価値法則を社会主義の諸条件のなかで再び経済理論および実践の基礎に置き、元のマルクス主義唯物論の土台に立ち帰らせ、社会主義の経済理論を〝主観主義的な〟誤りから治すことであった」[28]と弾劾する。停滞そのものを公衆の前では進歩として、賞揚されたいくらかの方法をそれらが急速な発展の必然的な付随物であるかのように示すことができるようにするため、そして批判的な認識を放逐するために生産を官僚主義的に操作することがもくろまれていた。

スターリンはソ連における価値法則を次のように規定している。

> 生産過程における労働力の支出をつぐなうために必要な消費物資が、わが国では、価値法則の作用をうける商品として生産され、そしてまた実現されている、というところに問題がある。まさにここで、生産にたいする価値法則の影響がはたらくのである……価値法則は、恒常的な法則であって、歴史的発展のすべての

時期にかならずあるものだとか、価値法則は共産主義社会の第二段階の時期には交換諸関係の規制者としての力をうしなうとしても、それはその発展段階でも、種々異なった生産諸部門間の諸関係の規制者としての、生産諸部門間の労働配分の規制者としての、その力を保持するだろう、といわれている。これはまったくただしくない。価値は、価値法則と同じように、商品生産の存在とむすびついた歴史的な範疇である。商品生産の消滅とともに、価値およびその諸形態も、価値法則も、消滅するだろう。(29)

ルカーチはスターリンが「おそらく間違いというよりもむしろ戦術的な配慮から、価値法則自体とこの法則の商業における現象形態とを混同している」と指摘する。ルカーチは、マルクスが『資本論』第一巻のなかで価値法則が「ロビンソンのもとで、中世の独立した農家で、そして最後に社会主義自身のなかで、どのように現れるか」について述べていることや、「労働時間の社会的に計画的な配分は、いろいろな欲望にたいするいろいろな労働機能の正しい割合を規制する……労働時間は、同時に、共同労働への生産者の個人的参加の尺度として役だち、したがってまた共同生産物中の個人的に消費されうる部分における生産者の個人的な分けまえの尺度として役だつ」と規定していることをあげ、スターリンの規定を批判している。ルカーチは、「社会主義建設の決定的な諸問題において、マルクスが正しく説明した学説の実現に何も手を加えていないかのように、マルクスの精神から逸脱した道を描こう」としたスターリンのトリックとして断罪している。(30)

同様な問題としてルカーチは、スターリンが「必要」労働と「剰余」労働、「必要」生産物と「剰余」生産物、「必要」時間と「剰余」時間というようなマルクスの概念も社会主義では存在しないと規定したことを批判している。ルカーチは、「労働者の再生産に社会的に必要な労働と、それによって余分になされた労働（剰余労働）の間の違いは、資本主義にだけ特徴的なのでは全くなく、古代から共産主義にいたるまで、一般に経済再生産の

発展の非常に重要で決定的な経済基準である」とする。生産手段の社会化は剰余価値の私物化を不可能にするが、「経済再生産のこの基本構造を廃止するのではなく、根本的に新しい調節形態を用い、社会的に進歩的に剰余労働を役だてられるようにするにすぎない」[31]と論駁している。

共産主義では価値法則は消滅するかどうかについて、現在のハンガリーでは「それほど先のことはわからないし、現在山積する問題に対処する方が先」という態度がほとんどで、特に研究への取り組みはみられない。一方、西側では特に新左翼にみられるように価値法則は止揚の対象としてのみ捉えられ、その結果、社会主義国の経済改革も否定的にのみ捉えられている。こうした状態は混乱を生む危険性があり、ルカーチの問題提起は経済学的に十分に検討される必要がある。

結び　ルカーチの限界

ルカーチのスターリン主義批判ということで多くの論点を見てきた。ルカーチの生涯は、ルカーチ自身のスターリン主義克服の歴史であったといえるかもしれない。ルカーチのスターリン主義批判の最大の特徴は、スターリン主義のなかに一段階革命論、プロレタリアートと農民の民主主義的独裁に基づかない「社会主義的原始蓄積」、労働組合の国有化、平和共存政策の否定などのトロツキズムを見ていることである。さらには、エタティズム、戦術やプロパガンダに科学を従属させるという逆転、価値法則の否定というようなスターリンに顕著に見られる事柄が批判の対象としてあげられた。またルカーチに見られるスターリン主義的傾向として、複数主義の否定すなわち一党制の問題を指摘した。

これらの事柄は複雑に相互に絡み合っていて、個別に分離することはできない。スターリン主義は多くの要素

による複合的な体系をなしていて、まだその全貌を完全に明らかにしえてはいない。スターリン主義に一党制を含めないという見方もあるだろう。今後、止揚の対象として全貌がより明らかにされていく必要がある。

現在のハンガリーでルカーチのしめる位置は、『生きられた思想　対話による自伝』のインタビュアーであったエルシ・イシュトヴァーンが、「ルカーチがいまやハンガリーにとって好ましい一市民にされてしまい、こともあろうにかれの国有化がなされた」[1]と的確に表現している。『歴史と階級意識』、「ブルム・テーゼ」、「文学と民主主義」など多くの論争でそのつど当時の主流派に敗北させられ、なかでも一九五六年の運動に参加したことから拘留され、一九六七年まで党員資格が認められず半反体制派知識人とでもいうべき位置をしめていた。一九六八年の改革導入で、「新メカニズムを支持していた政治家達は、ルカーチの一定の考え方やその権威によってメカニズムのイデオロギーをも創出するということはイデオロギー的な観点からちょうどよいと考え」[2]新『ネープサバチャーグ』一九六七年のクリスマス号にルカーチのインタビュー記事がのったのである。ルカーチの死後も、現体制を権威付けさせるためにルカーチは利用される傾向がある。

ルカーチによってスターリン主義批判は新たな段階に入ったといえよう。それは現実に行われている改革の方向に関連している。それだけにルカーチの限界も明らかにしておく必要がある。「最悪の社会主義でも最善の資本主義よりましである」というルカーチの信念は、ファシズムに対しては良い結果をもたらしたが、スターリン主義に対してはしばしば過小評価させ、災いの元ともなった。また「真理は一つである」という立場は、制度としての民主主義を軽視することになり、計らずもスターリン主義的政治体制の成立を助けることになってしまった。

ルカーチは「〝レーヴァイの悲劇〟は今日の人間の理解にとって最も重要で中心的な問題である」[3]と述べてい

る。レーヴァイ・ヨージェフは多くの重要な問題を極めて明晰に見ていながら、党指導部にとどまるために、ルカーチに対する攻撃に加担するなど多くの重要な問題で誤った決定を下してしまったが、ルカーチはそれを一つの悲劇的現象として捉えていた。ルカーチは党指導部にとどまることには何の未練も示さなかったが、「マルクス主義のルネサンス」やマルクス主義の擁護をはかるために、完全にはスターリン主義の全貌を捉えられず、スターリン主義的政治体制の成立を助けてしまった。このことは〝ルカーチの悲劇〟といえるのではないだろうか。

註

序

（1）“Beszélgetés Lukács Györggyel” *Népszabadság* 1967, december 24.

（2）正式名は「ハンガリーの政治・経済情勢とハンガリー共産党の任務に関するテーゼ」（Tézistervezet a magyar politikai és gazdasági helyzetről s a KMP feladatairól）。ブルムはルカーチの党員名。「ブルム・テーゼ」の一部分は一九五六年に『党史報告』（*Pártörténeti Közlemények* 3, Budapest, 1956）で公表された。この部分の邦訳は『ルカーチ初期著作集』第四巻（三一書房、一九七六年）所収。全文は一九七五年に『党史報告』（*Pártörténeti Közlemények* 4, Budapest, 1975）で公表された。

（3）ナジ・イムレ Nagy Imre（一八九六―一九五八）第一次世界大戦でロシアの捕虜となり、ロシア共産党（ボリシェヴィキ）に入党。一九二一年に帰国し、非合法のハンガリー共産党員として活動し、一九二九年にソ連に亡命した。第二次世界大戦後、帰国し一九五三年七月に首相となり農業問題に尽力したが、一九五五年三月に「右翼的偏向」を理由に解任され、党からも除名された。しかし一九五六年には民衆に支持され、十月十四日に復党し、民衆蜂起の後、二十七日に再び首相となった。ソ連軍の介入でルカーチらとともにユーゴスラヴィア大使館に避難したが、二十三日にル

マニアに連行され、一九五八年六月十六日に絞首刑に処せられた。

第一章

（1）Lukács György, "A szocializmus mint radikális, kritikai reformok kora" *Curriculum vitae* (Budapest, 1982) 379. l.

（2）クン・ベーラ Kun Béla（一八八六―一九三九）第一次世界大戦でロシアの捕虜となり、ボリシェヴィキ革命に参加。帰国後、ハンガリー共産党を結成し、一九一九年のハンガリー・ソヴィエト革命の事実上の首班となる。崩壊後、ウィーンに亡命。のちソ連に移り、コミンテルンなどで活躍するが、大粛清で逮捕され処刑された。

（3）ルダシュ・ラースロー Rudas László（一八八五―一九五〇）ハンガリー共産党創立メンバーのひとりで、党機関紙『ヴェレシュ・ウーイシャーグ』（赤色新聞）の編集長を務める。ソ連に亡命しコミンテルンの党大学の教授、第二次世界大戦後はハンガリーの中央党学校の教授を務めた。

（4）Lukács, im. 374. l.

（5）『ルカーチ初期著作集』第四巻（三一書房、一九七六年）所収。

（6）同右。

（7）ランドレル・イエネー Landler Jenő（一八七五―一九二八）ハンガリー社会民主党左派に属し、鉄道労働者同盟の指導者であったが、共産党との統一を推進し、ソヴィエト政権では商務および内務人民委員と赤軍最高指令官を務めた。崩壊後、ウィーンに亡命。

（8）*Gelebtes Denken. Eine Autobiographie im Dialog*, Red.: Eörsi István (Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main, 1981). p. 132. 邦訳は『生きられた思想　対話による自伝』池田浩士訳（白水社、一九八四年）一四八頁。

（9）執行部を握るレオポリト・アヴェルバッハはトロツキー支持者で、ラップは一九三二年五月に解散し、アヴェルバッハは一九三八年ごろ粛清された。

（10）Lukács, im. 374. l.

（11）Hermann István, *Lukács György élete* (Budapest, 1985), 138. l.

（12）バーヴェル・フョードロヴィチ・ユージン（一八八九―一九六八）　ソ連の哲学者。スターリンの忠実な支持者とし

て、ミーチンとともにデボーリン派を粉砕した。雑誌『マルクス主義の旗の下に』の編集員になり、第二次大戦後はコミンフォルムのソ連代表、中国駐在大使などを務めた。

(13) イェレーナ・フェリクソヴナ・ウシエヴィチ Jelena Felixowna Ussewitsch ソ連の女性文学評論家。一九三〇年代の代表的な批評家のひとり。

(14) Lukács, im. 375. 1.

(15) ヘルマン・イシュトヴァーン Hermann István（一九二五―一九八六） ルカーチの弟子のひとり。エトヴェシュ・ローランド大学文学部教授。

(16) Hermann, im. 138. 1.

(17) Uo. 142. 1.

(18) Lukács, im. 375. 1.

(19) Lukács György, "Volkstribun oder Bürokrat?" *Internationale Literatur* 1940, Nr. 2. 79-84., Nr. 3. 75-81.

(20) Lukács, im. 375. 1.

(21) ケレン・ヨージェフ Kelen József ハンガリー・ソヴィエト革命に参加。エンジニアで、ソ連での亡命期に牛乳企業の企業長を務める。

(22) Hermann, im. 140. 1.

(23) Lukács, im. 375-376. 1.

(24) ラーコシ・マーチャーシュ Rákosi Mátyás（一八九二―一九七一） 第一次世界大戦でロシアの捕虜となり、帰国してハンガリー共産党の結成に加わり、革命政府の商務副人民委員などを務める。第二次世界大戦後はハンガリー共産党総書記および首相としてスターリン路線を遂行。一九五六年の民衆蜂起でソ連へ亡命した。

(25) *Gelebtes Denken. Eine Autobiographie im Dialog*, p. 159-163.『生きられた思想　対話による自伝』一七九―一八五頁。

第二章

(1) Szabó Bálint, *Népi demokrácia és forradalomelmélet* (Budapest, 1974), 180. 1.

(2) Uo. 190-196. 1.

(3) レーヴァイ・ヨージェフ Révai József（一八九八―一九五九）　一九一八年秋の共産党結成に参加し、党内最左派の理論家として活動。革命の敗北後ウィーン、ベルリンやモスクワで亡命生活を送り、ランドレル派に属していた。「ブルム・テーゼ」の敗北後、党指導部に留まるためクン派に移った。一九四九年六月から一九五三年七月まで文部相。一九五三年七月から一九五八年十一月まで幹部会副議長。

(4) Révai József, "A népi demokrácia fejlődésének néhány főbb problémája" ("Elméleti feladataink és a pártoktatás" c., a Magyar Dolgozók Pártja I. Oktatási Értekezletén 1948 szeptember 25-én tartott előadásából) in *Olvasókönyv a marxizmus-leninizmus tanulmányozására II.* (Budapest, 1949), 497-498. 1.

(5) Lukács György, "Irodalom és demokrácia" *Lukács György válogatott muvei III. Magyar irodalom-magyar kurtúra* (Budapest, 1970), 326. 1.

(6) ビボー・イシュトヴァーン Bibó István（一九一一―一九七九）　一九四五年に臨時民族政府の内務相エルディ・フェレンツ（民族農民党）に抜擢され、デブレツェンの内務省地方行政官となる。その後、民族農民党に入党。一九五六年十一月二日ナジ・イムレ政府の国務相となる。一九五七年五月に逮捕され服役し、一九六三年五月に恩赦で出獄。中央統計局の図書館に職を得る。

(7) Bibó István, "A magyar demokrácia válsága" *Valóság*, II, III, IV. (Budapest, 1945)，南塚信吾『静かな革命ハンガリーの農民と人民主義』（東京大学出版会、一九八七年）二三九―二四七頁参照。

(8) Uo. 5. 1.

(9) Uo. 43. 1.

(10) Uo. 42. 1.

(11) Uo. 29. 1.

(12) Uo. 8-11. 1.

(13) Uo. 19-21. 1.

(14) "Vita demokrácia válságáról" *Valóság*, II. (Budapest, 1946)

(15) Uo. 87. 1.
(16) Uo. 89. 1.
(17) Uo. 94. 1.
(18) ネーメト・ラースロー Németh László（一九〇一―一九七五） ハンガリーの作家・批評家。一九三〇年代以後は人民派作家の理論的指導者。
(19) 一九五六年二月のソ連共産党第二十回大会でフルシチョフによってスターリン批判が行われると、ハンガリーでは〝ハンガリーの小スターリン〟と呼ばれたラーコシに対する批判が盛り上がり、知識人は「ペテーフィ・サークル」を作った。ペテーフィは一八四八年三月革命で活躍したハンガリーの愛国詩人。
(20) Lukács György, "A marxista filozófia időszerű problémái (Lukács György felszólalása a Petőfi-kör filozófusvitáján)" *Curriculum vitae* (Budapest, 1982), 161-162. 1.
(21) Lukács György, "Irodalom és demokrácia" *Lukács György válogatottművei III. Magyar irodalom-magyar kultúra* (Budapest, 1970), 320-334. 1.
(22) Uo. 321. 1.
(23) Uo. 321-323. 1.
(24) Uo. 324. 1.
(25) Uo. 324-326. 1.
(26) Rudas László, "Irodalom és demokrácia" *Társadalmi Szemle* 6-7 (Budapest, 1949), 417-420. 1.
(27) ライク・ラースロー Rajk László（一九〇九―一九四九） 一九三〇年に非合法の共産党に入党し、スペイン内戦では国際旅団ハンガリー大隊の政治委員として活躍した。一九四五年に党中央委政治局員、四六年から四九年まで内務相、四八年からは外相も兼ねる。四九年に「チトー主義者」としてみせしめ裁判で死刑に処せられた。
(28) Lukács György, Az egzisztencializmus, in: *Utam Marxhoz II.* (Budapest, 1971)
(29) Lukács György, "A szocializmus mint radikális, kritikai reformok kora," 377. 1.

第三章

(1) Gelebtes Denken, Eine Autobiographie im Dialog, 214. 池田、前掲『生きられた思想　対話による自伝』二四二頁。

(2) ホルティ・ミクローシュ Horthy Miklós（一八六八―一九五七）　オーストリア海軍提督を務めた後、一九一九年の革命に対する反革命軍の指揮者となり、革命の崩壊後、一九二〇年の王政復古を達成し、その摂政となり、事実上の国家元首として一九四四年にクーデターで倒されるまでハンガリーにファシスト支配を行った。

(3) Lukács György, "A marxista filozófia időszerű problémái (Lukács György felszólalása a Petőfi-kör filozófusvitáján)" 160-162. 1.

(4) Lukács György, *A haladás és reakció harca a mai kultúrában* (Budapest, 1956), 7-11. 1.

(5) Uo. 26. 1.

(6) サーントー・レジェー Szántó Rezső（一八九二―　）　法学者。『*Tartós békéért, népi demokráciáért*（永久平和と人民民主主義のために）』誌のハンガリー語版の編集長。

(7) "Vita a 'Blum-tézisek'-ről," *Párttörténeti közlemények* 3 (Budapest, 1956), 126. 1.

(8) カトー・イシュトヴァーン Kató István（一九二〇―　）　歴史学者。エトヴェシュ・ローランド大学学部長。

(9) "Vita a 'Blum-tézisek'-ről", 109. 1.

(10) Szabó Bálint. Id. mu, 52. 1.

(11) シクローシュ・アンドラーシュ Siklós András（一九二二―　）　農業技術者。エトヴェシュ・ローランド大学歴史学科。

(12) "Vita a 'Blum-tézisek'-ről", 124, 1.

(13) 『レーニン十巻選集』第三巻（大月書店、一九七一年）九三頁。

(14) "Vita a 'Blum-tézisek'-ről", 114. 1.

(15) 姫岡玲治訳『トロツキー選集』第五巻（現代思潮社、一九六九年）二四頁。

(16) J・ジョル著、河合秀和訳『グラムシ』岩波書店、一九七八年）一三六頁。

(17) カールマーン・エンドレ Kálmán Endre（一九〇九―　）『*Pártélet*（党生活）』誌の編集者。

(18) "Vita a 'Blum-tézisek,-ről", 119–120. 1.
(19) Lukács György, "Madács tragédiája", *Szabad Nép*, 1955.
(20) Hermann, im. 193. 1.

第四章

(1) *Nuovi Argumenti* 1962, 7, 10. ルカーチは「カロッツィ書簡」をドイツ語で書き、そのオリジナルは「スターリニズムについての私書簡」と題してオーストリアと西ドイツでも紹介されている。*Forum*(Wien, 1963), Peter Ludz(Hasg.), a. a. O. ハンガリーでは一九八三年になって初めて紹介された。"Lukács György válasza a Nuovi Argumenti körkérdésére", *Kritika* 1 (Budapest, 1983)
(2) "Lukács György válasza a Nuovi Argumenti körkérdésére", 23. 1.
(3) Uo. 24. 1.
(4) Uo.
(5) 大屋史郎等訳『トロツキー選集』第十巻（現代思潮社、一九六三年）二三五頁。
(6) "Lukács György válasza a Nuovi Argumenti körkérdésére", 24. 1.
(7) Uo. 25. 1.
(8) Uo.
(9) "Lukács György válasza a Nuovi Argumenti körkérdésére", 25. 1.
(10) Uo. 25–26. 1.
(11) Uo. 25–27. 1.
(12) Uo. 27. 1.
(13) 「新経済機構」は中央の計画体制を保持しながら、計画の予算の大部分をそれまでの制度的な統制や強制的に決められた命令によってではなく、間接的な経済的統制（価格・賃金・税制・信用など）によって実現しようとする。これらのなかでも最も主要な統制の役割をする価格制度に重要性を置いている。以前、ほとんどが計算や管理の役割をしていた諸価格が市場の影響を調節することになり、企業は必要な経済情報を得て順応しなければならず、さらには価格体系

の機能が適正な利益と刺激を生み出すことになった。農業の分野でも過度の集権化を解消し、生産効率を上げるため、生産協同組合が所有している土地を農家に割り当てて耕作させるいわゆる自留地生産が奨励された。cf. Berend T. Iván, *A szocialista gazdaság fejlődése Magyarországon 1945–1975*, 139–140. l.

(14) ハンガリー社会主義労働者党機関誌。

(15) "Beszélgetés Lukács Györggyel", *Népszabadság* 1967, december 24.

(16) Uo.

(17) Lukács György, "Demokratizálás ma és holnap" in: *Lenin* (Budapest, 1970), 210–230. l.

(18) Lukács György, "Demokratizálas ma és holnap", *Világosság* 8–9 (Budapest, 1981), 552–559. l.

(19) Lukács György, "Demokratizálódás jelene és jövője", *Világosság* 4 (Budapest, 1984), 261–269. l

(20) Lukács György, *Demokratisierung heute und morgen* (Budapest, 1985)

(21) Lukács György, "Demokratizálás ma és holnap", *Világosság* 8–9, 555. l.

(22) "Beszélgetés Lukács György világhírű marxista filozófussal", *7 Nap* 1970. Januar 1, (NoviSad)

(23) Lukács György, "Demokratizálás ma és holnap", *Világosság* 8–9, 558. l.

(24) ポジュガイ・イムレ Pozsgay Imre（一九三三―　）歴史・哲学者。一九五七年から一九七五年まで党機構の様々な部署に従事した後、文化大臣代理、文化大臣となる。一九八二年から一九八八年七月まで愛国人民戦線の第一書記。一九八〇年以来、党中央委員。一九八三年に国会議員、一九八八年五月に政治局員となる。

(25) "Interjú Pozsgay Imrével", *Heti Világgazdaság*（週刊世界経済）1988. november. 5. (Budapest), 6. l.

(26) Lukács György, "Demokratizálódás jelene és jövője", *Világosság* 4, 268. l.

(27) Uo. 268–269. l.

(28) Uo. 265. l.

(29) イ・ヴェ・スターリン、全集刊行会訳、『ソ同盟における社会主義の経済的諸問題』（大月書店、一九七二年）、二七―二三〇頁。

(30) Lukács György, "Demokratizálódás jelene és jövője", 266. l.

(31) Uo. 267. 1.

結び

(1) *Gelebtes Denken. Eine Autobiographie im Dialog*, p. 28.『生きられた思想　対話による自伝』三十二頁。

(2) Hermann, im. 204. 1.

(3) "Beszélgetés Lukács Györggyel", *Népszabadság* 1967. december 24.

（博士後期課程）